

## つながる人とデータ : IFLA WLIC 2013における Linked Dataとコミュニティ活動

天野, 絵里子  
九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 : 係長

<https://hdl.handle.net/2324/1475358>

---

出版情報 : 大学図書館研究. 100, pp.97-103, 2014-03. 学術文献普及会  
バージョン :  
権利関係 :

# つながる人とデータ：IFLA WLIC 2013 における Linked Data とコミュニティ活動

天 野 絵 里 子

**抄録**：Linked Data は、2013 年 8 月にシンガポールで開催された IFLA World Library Information Congress で最も話題となっていたテーマの一つである。本稿では、Linked Data に関するサテライト・ミーティングで発表された各国の事例等を紹介し、Linked Data が大学図書館で実際に活用されるようになった場合のインパクトとそれによる業務の変化について考察する。また、IFLA は、Linked Data 以外にも、様々な課題に取り組む多くの図書館員のグローバルな実践コミュニティ活動に支えられている。中でもユニークな取り組みを行っている、新しい図書館員を支援するネットワークとして New Professionals Special Interest Group の活動を紹介し、日本の大学図書館員がこのようなグローバルな活動に関わる可能性について述べる。

**キーワード**：IFLA, Linked Data, コミュニティ活動

## 1. はじめに

2013 年 8 月 17 日から 23 日にかけてシンガポールで開催された、IFLA の年次大会 World Library Information Congress (以下、IFLA 大会)に参加した。「未来の図書館：限らない可能性」というテーマのもと、200 を超える委員会やセッション、そして会期前後のサテライト・ミーティングや図書館ツアーなどが行われ、多様な館種の多岐に渡る課題について、120カ国以上から約 3,750 名の図書館員が集い、プレゼンテーションやディスカッションを行った。IFLA 大会は、また、懇親会や、あちらこちらで行われるコミュニケーションを通じ、世界中の図書館員の情報交換や人間関係づくりの絶好の機会ともなっている。大会の様子については、カレントアウェアネス-E<sup>1)</sup> および Code4Lib JAPAN カンファレンス 2013 (南三陸町)<sup>2)</sup> でも報告しているので、参照されたい<sup>3)</sup>。



写真1 ポスターセッションにて

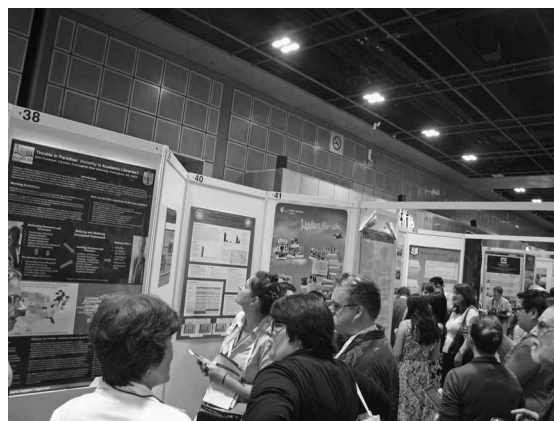


写真2 ポスターセッション会場の様子

本稿では、まず、大会参加にあたり筆者が着目していたテーマの一つである Linked Data について、IFLA 内での動向を伝えるとともに、実際に図書館員や利用者が Linked Data をベースにしたサービスのエンドユーザとなってきた時に何が変わるのか、また、サービスの提供者として大学図書館員はどのようなことを知り、どう対応すればよいのかについて関心を促すことを試みる。Linked Data は、世界の図書館員が注目している話題の一つである。日本でも、技術的な議論や、NII、国立国会図書館からのデータ提供が始まっているが、利用者へのサービスへの展開についての議論はまだ始まったばかりであろう。

また、IFLA 中のコミュニティ活動についても紹介し、日本の大学図書館員がこのようなグローバルな活動に関わる可能性について述べる。IFLA は、Linked Data だけでなく、様々な課題に取り組

む多くの図書館員のグローバルなコミュニティ活動に支えられている。中でも、ユニークな取り組みを行っているのが、新しい図書館員を支援するネットワークとして New Professionals Special Interest Group である。このグループが主催していたワークショップの内容や、参加した経験についても述べる。

## 2. つながるデータと図書館

### 2-1. Linked Data と図書館

Linked Data は、もともとセマンティックウェブの分野で提唱されている、ウェブ空間においてデータ間に意味のあるリンクを生成する仕組み<sup>4)</sup>であるが、近年、図書館の世界にも紹介されるようになってきた。この背景には、図書館の内外にいくつかの理由が存在する。

まずは、各国の政府による公的データのオープン化、つまりオープンデータの流れである。アメリカ、イギリスを始めとして、日本でも公的な統計データ等の機械的に利用されやすい形式でのオープン化が進んでいる。その中で、相互運用性に優れたデータの公開手法として Linked Data があり、公的データである図書館の書誌データもまた同様の形式でオープン化される必要性が高まっている。国立国会図書館による典拠データは、Linked Data として利用することができる<sup>5)</sup>。

図書館のデータはもともとセマンティックウェブの考え方になじみやすく、データそのものの記述の信頼性も高く、活用の可能性が大きいとの見方もある。逆を言えば、図書館の書誌データが従来のままであることによって、ウェブ検索に慣れた利用者に価値が伝わりにくくなっている昨今、図書館が積み上げてきた書誌や典拠データの価値を引き出す手法としても捉えられている<sup>6)</sup>。

NACSIS-CAT の書誌レコードが著者名典拠レコードや統一著作典拠レコードに ID によってリンクしており、OPAC などのインタフェース上ではリンクをたどって相互に情報を参照できたり、リンクしているレコードを一覧できたりするので、Linked Data の考え方が与える最初の印象は、図書館員にとって新しくはないかもしれない。ただし、今までの書誌や典拠の情報は、NACSIS-CAT の中にすべてなければならぬし、中でのみリンクしあっているに過ぎなかった。Linked Data の世界では、これらが図書館の外の、広大なウェブ上のデータともつながるし、外部からもリンクされる可能性が生まれるため、利用者が辿り着きやすくなるのである。

### 2-2. IFLA における Linked Data

IFLA はすでに 2010 年ごろから Linked Data を課題の一つとして取り上げ、情報技術分科会 (Information Technology Section) を中心として、技術的な標準化やサービスへの可能性を議論してきた。2010 年 8 月にスウェーデンのヨーテボリで開催された IFLA 大会でも大きな話題になっており、このことは兵藤の大会参加報告に詳しい<sup>7)</sup>。この時点ですでに米国議会図書館やスウェーデン国立図書館、ドイツ国立図書館などの目録データが Linked Data に対応した方式でデータの公開を行っていた。

IFLA シンガポール大会会期中に行われた情報技術分科会の常任委員会でも、データ標準等の技術的な観点や事例の紹介など、様々な切り口から Linked Data の普及に向けてさらなる活動を進めていくことが決定されたとのことである<sup>8)</sup>。

IFLA の中で Linked Data の図書館への適用の可能性を広げていく中心的なコミュニティとして、2011 年のプエルトリコでの IFLA 大会より、IFLA の情報技術分科会のもとに Semantic Web Special Interest Group (以下、SWSIG)<sup>9)</sup> が設けられ、その活動が始められた。SWSIG は、セマンティックウェブの最新技術により図書館のデータを活かし、システムを発展させ、典拠データやシソーラスを広く外部のコミュニティへも提供することを目指している。このような取り組みは技術のわかるライブラリアンのみにとどまりがちであるが、SWSIG は、図書館のコミュニティ全体にセマンティックウェブの可能性を示し、共有していくこともその目的としている。

シンガポールで SWSIG が主催した公開セッションは、そういったグループの目的を反映させたもので、すでに Linked Data を取り扱っている技術肌のライブラリアンから、Linked Data のことをよく知らない者までをカバーした内容であった。広い会場で、参加者は四つのトピックあるいは「初心者向け」グループに分かれてディスカッションを行う。四つのトピックは、「標準とマッピング」「つながりと協働」「Linked Data の利用と再利用」「調理器具とレシピ」であり、それぞれ 20 名ほどの参加者があった。筆者は「初心者向け」のグループに参加したが、参加者数は最も多く、アジア系の参加者はここに集まったようであった。SWSIG の主査である Emmanuelle Bermès 氏によるわかりやすい説明がなされ、次年度の IFLA 大会では図書館の管理職や目録担当者向けのチュートリアルがあるとよいといった意見が出た<sup>10)</sup>。

シンガポール国立図書館のブースでも、Linked

Dataによる書誌データの発信についての展示があるなど、Linked Dataに対する関心の高まりは欧米だけではなくてきていると実感した。

### 2-3. 見え始めた Linked Data の活用事例

IFLA 大会に先立つ 8 月 16 日にジュロン地域図書館で SWSIG の主催で行われたサテライト・ミーティングでは、まだ試行段階のものも含め、Linked Data のさまざまな活用事例が発表された<sup>11)</sup>。ミーティングのタイトルは「Linked Data がつくる利用者との対話 (User Instruction Built on Library Linked Data)」であり、Paola Di Maio 氏の基調講演では、知識をつなぐ Linked Data の可能性が述べられた。

フランス国立図書館が試行的に提供する OpenCat は、Linked Data を最も図書館らしいインタフェースで実用化しようとしている。data.bnf.fr は、2011 年にフランス国立図書館のもつ書誌データを Linked Data 形式で提供することによって、再利用されることを目的にスタートしたサイトである。このデータをベースとし、FRBR モデルに基づいた検索インタフェースが OpenCat である。公共図書館の所蔵データを結びつけることによって、ローカル OPAC としても機能するとのことである。

同じくフランスからは Bermès 氏が、「ライブラリアンが作った美術館のウェブサイト」としてポンピドゥー・センターの検索サービスを紹介した。サービスのベースになっているのは、異なる種類のデータをリンクさせたデータモデルである。美術作品は、関連書籍、関連イベント、場所、アーティストなど人物情報、コレクション名などに結び付けられている。よって、検索インタフェースでも、そのリンクを利用して関連の情報へとたどって行くことができる。美術作品に対して利用者が持つさまざまな興味・関心に応えるサービスと言えるだろう。

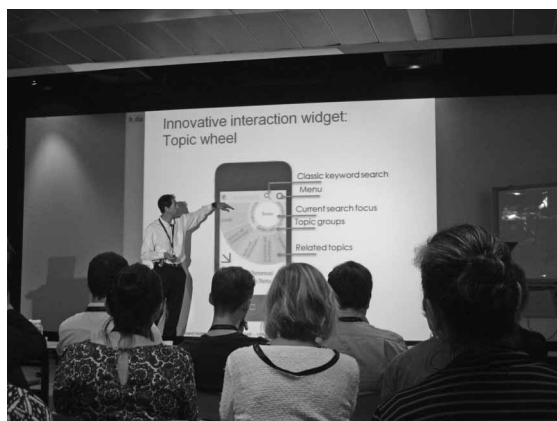


写真3 ドイツからの発表

アメリカのノースカロライナ州立大学チャペルヒル校で行われた資料に関する注釈の保存・活用の試行事例や、ドイツ国立図書館のデータを活用した検索キーワード選択支援アプリ Topic wheel の発表も印象深かったが、これらは図書館コミュニティ外の人が図書館の Linked Data を活用した事例として注目に値する。

Bermès 氏は、後日自身のブログに、スウェーデン国立図書館の Martin Malmsten 氏の言葉を引きながら、セマンティックウェブの問題の本質はこういった活用事例ではないにしても、その理念を非技術者、特に政策立案者にわかりやすく説明するには「見せる」ことが重要であると述べている<sup>12)</sup>。このサテライト・ミーティングもまた、Linked Data のなかなか見えにくい技術的な価値を伝える機会であったのである。



写真4 SWSIG によるサテライト・ミーティング

### 2-4. Linked Data が変える情報探索

Linked Data の仕組みによって情報がつながりはじめたときに、図書館のサービスはどのように変わるか、その一端を見せてくれたのが OCLC のプレゼンテーション<sup>13)</sup>であった。OCLC は、加盟館を中心に世界中の 3 億の書誌情報を取り扱っており、所蔵データの数は 20 億にも上る。それらをユーザーに届けるインタフェースが、周知の WorldCat であり、Linked Data で書誌データの提供を行っている<sup>14)</sup>。また、すでに Linked Data を活用した検索インタフェースとして、Facebook 上のアプリ<sup>15)</sup>を実験的に公開している。

OCLC は、「第二次世界大戦がその後に与えた文化的インパクトについて、ある国について考察せよ」という課題を与えられた一人の女子学生がどのように図書館の資源にたどりつくかというシナリオが示される。まず、課題に取り組み始めた彼女は、馴染みのある Google や Amazon から関連の情報を

探そうとする。しかし、ウェブ上のさまざまなサービスで得られる情報は断片化しており、必ずしも図書館のデータに結びついているわけではないので、彼女はそこからすぐには図書館に豊富にある資源にたどり着くことができない。図書館は、蔵書を構築しそれを利用者に届けるために、Select（選択）、Acquire（受入）、Describe（記述）、Preserve（保存）という非常に洗練された仕組みをもっているが、現代の利用者が情報を得る場所に図書館の情報をExpose（露出）するという考え方が必要である。書誌情報をExposeするためには、データの構造に対する考え方を変える<sup>16)</sup> 必要があり、OCLCは目下それに取り組んでいるとのことである。書誌や所蔵の情報がウェブ環境に望まれる形で、つまりリンク可能な状態でExposeされていれば、たとえば件の女子学生がレポートの対象としてドイツを選び、ウェブ検索からギュンター・グラスの「ブリキの太鼓」に興味を持った時、Wikipediaのギュンター・グラスの項目や、そこからその本を所蔵している身近な図書館へと自然と導くことが可能になる。

## 2-5. 大学図書館へのインパクト

以上のように、Linked Dataは図書館の書誌・所蔵情報の管理や利用者サービスを変革しつつあるが、大学図書館における実際の仕事にはどのようなインパクトがあるのだろうか。また、その変化に対して大学図書館員はどう対応すべきなのであろうか。担当業務別に考察し、最後にコミュニティ活動への期待を述べる。

まず図書館の管理職にとっては、目録の管理者と協力し、自館の目録業務を合理化しながら図書館の新たな価値を高めるチャンスとなるであろう。すでにNACSIS-CATの枠組みは、目録情報の共有で成果を上げてきた。ただし、ここではあくまで図書館の目録情報の中のみで情報と業務の共有が実現しているにすぎない。データがつながりあうウェブの世界では、図書館以外の情報も図書館のデータに結びつけることができるので、検索サービスのインタフェースを通じて利用者に提供できる情報をより豊かなものにしながら、業務の合理化も可能となるであろう。図書館の新たな役割として、特殊コレクションや、学内の博物館や文書館等の持つデータは同じ学内にありながら断片化していたが、これらを図書館がうまく整理して標準的な形式で公開すれば、大学全体に貢献することも可能となる。データの品質に関して、従来は書誌情報の記述の良し悪しに重きがおかれていたが、これからは、リンクの精

確さが基準の一つとして重要性が高まり、異なる語彙を持つデータセットをどのようにリンクすれば適切かつ有効かといったことにも観点が移っていくであろう。

Linked Dataを活用した検索サービスが普及した近い将来、レファレンスや利用教育の担当者にとっても、そのサービスの内容を変化させる必要があるだろう。情報が各データベース・サービスに断片化されている従来の環境では、大学図書館員や利用者は、得たい情報によってどれを検索すればよいか学習する必要があった。Linked Dataが実現する環境では、情報が芋づる式に得られるため、混乱しないように情報検索をより戦略的に行わなければならないし、大学図書館員は率先してその方法を開拓する必要がある。また、情報を利用する際には信頼性を判断することが重要であるが、その判断の基準の一つとして、情報と情報のリンクの精確さも考慮する必要が生じるであろう。検索サービスの有用性は、そのインタフェースによるところが大きいだが、Linked Dataを活用したサービスのインタフェースの開発はまだ未知数である<sup>17)</sup>。サービスの現場からのフィードバックが期待される。

Linked Dataの仕組みが図書館の書誌・所蔵情報に浸透していくと、今後図書館の業務を変えていく可能性があるが、データ提供の実践的な取り組みはまず国レベルの図書館が行っているため、それ以外の図書館ではなかなか自分たちのテーマとして捉えにくい。しかしながら、日本の図書館界でも、日本図書館研究会の情報組織化研究グループが平成25年度の研究テーマとして「LOD時代の書誌コントロール」<sup>18)</sup>を掲げて勉強会を実施するなど、知識の普及が進んでいる。RDAやFRBRなど、目録の新しい動向に関する勉強会もあちこちで行われていることから、図書館資料の管理の面で従来ベースにしてきた考え方を革新する機運は高まっているのではないかと考えられる。そして、各勉強会が、図書館の壁を超えたコミュニティとしても機能する可能性があるのではないだろうか。各勉強会参加者の今後の活動に注目するとともに、IFLAのような国際的な場での日本からの貢献を期待したい。

## 3. 人のつながりで支えあう

### 3-1. 新しい図書館員のグローバルなネットワーク

IFLAは、Linked Dataに関してだけでなく、様々な新しい課題に取り組むために、各分科会のもとにSpecial Interest Groupを置いている。中でも筆者が注目していたのは、New Professionals Special Interest Group（以下NPSIG）の活動であり、

8月22日にはこのグループの主催するワークショップに参加した。

NPSIGは、図書館協会経営分科会が支援するグループで、グローバルな図書館員のネットワークづくりを目的としている。IFLA大会の会期の前には“IFLAcamp2”の2日間のプログラムを実施していた。参加していないので詳細は不明であるが、「アンカンファレンス」という、あらかじめ明確なテーマを決めずにその場でテーマを決めてグループで議論するといった自由な形式で行われたとのことである。また、NPSIGは、各国のライブラリアン同士のペアを作り、期間を定めてコミュニケーションを促すなどユニークな活動を行っている。

IFLA大会でこのグループが主催したワークショップは、“New Librarians Global Connection: best practices, models and recommendations”と題し、テーマ別に4つのグループに分かれ、ファシリテーターのもとでそれぞれがディスカッションなどをおこなうという形式であった<sup>19)</sup>。グループのテーマは、「未来の図書館を担う新米ライブラリアンのためのインターンシップ」「汝自身のリーダーシップを知れ」「ディベート：リーダーシップはマネジメントより大事」といったもので、私が参加したのは「世界はあなたの思うまま (the world is your oyster)」という、図書館員として国際的なキャリアを歩むことについて考えるグループであった。現在西オーストラリアの大学図書館で働いているアメリカ出身のライブラリアンがファシリテーターを務め、「海外で働くにあたってはどんな問題があるか」「どんな良さがあるか」といった問いに約30名の参加者が口々に意見を言ったり、用意されたワークシートにそって各自が自己分析(家族や友人と離れても大丈夫か、異文化への適応性はあるか、など)を行ったりといったアクティビティがあった。隣の人とディスカッションする時間もあったが、ペアになった中国系の方は、アメリカなど数か国を渡り歩いてもうすぐ退職とのこと、話していて非常に刺激を受けた。

具体的なテーマのある発表やディスカッションで構成される他のセッションと比べて漠然としたテーマのワークショップであるが、国境を超えて図書館員同士の横のつながりを促進するという目標を十分に達成していたように思う。また、参加者も非常に多く、このようなゆるやかなネットワーキングが各国の図書館員に望まれているのだということを実感した。



写真5 NPSIGによるワークショップの様子

#### 4. おわりに

本稿では、2013年のIFLA大会で筆者が目にした話題のうち、Linked Dataとコミュニティ活動について概括し、今まさに拡がりつつあるグローバルなデータと人の「つながり」をお伝えできるよう試みた。Linked Dataについては、技術的な議論を乗り越え、すでに多くの実践がある。これからは、Linked Dataの仕組みにもとづいて、異なるデータセットをつなげたり、ユーザ・インタフェースを開発したりすることによって有用性を追求する段階にきている。今後大学図書館の現場でLinked Dataが活用されていくにあたり、目録の面では書誌情報を図書館外のデータを結びつけることによって価値を高めながら業務を合理化できたり、サービスの面では利用者の情報行動に沿った検索環境を提供し、自然に図書館の資源に導くことができる可能性がある。大学図書館では、管理職層を含めた各担当者が、最新の動向をもとに従来の業務に対する考え方を変えていく必要があるだろう。

IFLAの内外を問わず、グローバルな図書館員のコミュニティ活動が拡がっている。Linked Dataなど新しいテーマに関しては、ボランティアかつIFLA公認のコミュニティとしての活動や、W3Cの図書館Linked Dataインキュベータグループ<sup>20)</sup>とが重なりあって、図書館におけるLinked Dataの活用を模索し、実際に試行錯誤してデータを創り、サービスを開発してきている。NPSIGなど、特定の技術や分野に取り組むのではない、ゆるやかなネットワーキング活動も興味深い。今回IFLA大会に参加し、こういったグローバルなコミュニティ活動が、IFLA大会がテーマにした「未来の図書館」を作っていくのだと実感させられた。

日本でもこのようなコミュニティ活動は盛んであるが、国境を超える活動に参加している大学図書館員はごく少ない。ここには言語の壁の他に、自らの

知識と経験、権限と責任を持ってコミュニティ活動に個人として参加することが難しい、日本の大学図書館における人的資源管理特有の大きな課題をあらためて感じることもあった。

図書館は、資料の情報や人がつながることによって大きな力を生み出すことができる。今回の IFLA 大会に参加でそのことが再確認できたとともに、Linked Data についてなど、新しい課題に対する多様な知見を得ることができた。

## 謝辞

今回の渡航は、平成 25 年度国立大学図書館協会海外派遣事業および九州大学附属図書館の助成により実現した。この場を借りて関係者の方々にあらためて御礼申し上げる。また、あたたかく送り出してくださった職場の人たち、渡航中の Twitter や Facebook への投稿を見守り、「いいね！」やコメントを寄せてくださった方々にも感謝したい。

8 月 19 日から 2 日間に渡るポスタープレゼンテーションでは、“Creating the Future Ecosystem of Academic Resources in Kyushu University”<sup>21)</sup> と題して九州大学附属図書館における e リソース管理とサービスおよび関連の学習支援活動について紹介した。ポスターの作成にあたっては、同僚の工藤絵理子、兵藤健志両氏より助言をいただいた。このポスターについては、後日フィンランドから問い合わせがあったり、内容に関係するベンダのサポートチームから好評をいただけたことも記しておきたい。

- 1) 天野絵里子. シンガポールで「未来の図書館」を考える：IFLA WLIC 2013. カレントアウェアネス-E. 2013, no. 245, E1479. <http://current.ndl.go.jp/e1479>, (参照 2014-01-19).
- 2) Amano, Eriko. Hot topics at IFLA WLIC 2013. Code4Lib JAPAN カンファレンス 2013. 2013. <http://www.slideshare.net/amanoeriko/hot-topics-at-ifla-wlic-2013>, (参照 2014-01-19).
- 3) また、今年度（平成 25 年度）の海外派遣事業より、派遣中のソーシャルメディアによる情報発信が奨励された。筆者も、Twitter（ハッシュタグ“# 国大図協派遣”）や Facebook の「国大図協海外派遣事業」ページにおいて、大会のようすやその場での感想、ネット利用や食事など現地での生活についても発信をおこなった。
- 4) 技術的な解説は以下の書籍を参照されたい。トム・ヒース、クリスチャン・バイツァー；武田英明 [ほか] 訳. Linked data : web をグローバルなデータ空間にする仕組み. 近代科学社. 2013. 139p.

(ISBN 9784764904279).

- 5) 大向一輝. オープンデータと Linked Open Data. 情報処理. vol.54, no.12, p.1204-1210.
- 6) 国立国会図書館が翻訳している World Wide Web Consortium (W3C) の図書館 Linked Data インキュベータグループの報告書がくわしい. <http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/standards/translation.html>, (accessed 2014/01/20).
- 7) 兵藤健志. IFLA ヨーロッパ大会参加レポート. 大学図書館研究. 2011, vol. 92, p. 36-47.
- 8) 国立国会図書館. IFLA WLIC 2013 SINGAPORE 未来の図書館：無限の可能性：世界図書館・情報会議 第 79 回国際図書館連盟 (IFLA) 年次大会. 国立国会図書館月報. 2013, no. 633, p. 4-17.
- 9) Semantic Web Special Interest Group. IFLA. (online), <http://www.ifla.org/swsig>, (accessed 2014-01-20).
- 10) Bermès, Emmanuelle. Report from the Semantic Web SIG session in Singapore. IFLA. 2013-08-28. (online), <http://www.ifla.org/node/7989>, (accessed 2014-01-20).
- 11) いくつかの発表要旨は下記のサイトで提供されている. <http://www.ifla.org/it/conferences>, (accessed 2014/01/20).
- 12) Bermès, Emmanuelle. UILLD : un satellite de l'IFLA, FIGOBLOG. 2013-08-22. (online), <http://www.figoblog.org/node/2017>, (accessed 2014/01/20).
- 13) Prichard, Skip; Fons, Ted; Wallis, Richard. Collective impact and the power of shared data. IFLA World Library and Information Congress. 2013-08-21. (online), [http://www.oclc.org/content/dam/oclc/events/2013/IFLA2013/IFLA\\_PowerSharedData-FINAL.pdf](http://www.oclc.org/content/dam/oclc/events/2013/IFLA2013/IFLA_PowerSharedData-FINAL.pdf), (accessed 2014-01-19). 同様のスライド資料を使った Ted Fons によるプレゼンテーション動画が公開されており、わかりやすい。Fons, Ted. Collective impact and the power of shared data. OCLC Video, 2012-12-05. <http://www.youtube.com/watch?v=roQ5eqAkEcE>, (accessed 2014/01/19). Wallis, Richard. What the Web wants, OCLC Video, 2012-12-06. <http://www.youtube.com/watch?v=GJsoV7zidAw>, (accessed 2014-01-19).
- 14) WorldCat の各書誌の最下段、「リンクデータ」の部分で実際のデータが見られる。OCLC は、その他に著者典拠の VIAF、LCSH の Linked Data 版を FAST として一般に提供している。
- 15) OCLC. WorldCat Facebook app. (online), <https://apps.facebook.com/worldcat/>, (accessed 2014-01-19). 検索結果で「Related people and topics」をクリックすると、VIAF と FAST を活用した関連著者および主題へのリンクと情報が見られる。

- 16) 新しい目録データの管理とは、従来のレコードの単位から、ID 付きのエンティティを単位としたグラフ構造によるデータ管理が基礎となると説明される。
- 17) Salo, Dorothea. Linked Data in the creases. Library Journal. 2013-12-12. (online), <http://lj.libraryjournal.com/2013/12/opinion/peer-to-peer-review/linked-data-in-the-creases-peer-to-peer-review/>, (accessed 2014-01-19).
- 18) 日本図書館研究会情報組織化研究グループ. 2013 年度の研究テーマ「LOD 時代の書誌コントロール」, 2013. (online), <http://josoken.digick.jp/profile/theme.html#2013>, (参照 2014-01-19).
- 19) New Professionals Special Interest Group. WLIC 2013. IFLA New Professionals Special Interest Group. 2013-08-22. (online), <http://npsig.wordpress.com/wlic-2013/>, (accessed 2014-01-19).
- 20) W3C Library Linked Data Incubator Group. W3C. (online), <http://www.w3.org/2005/Incubator/ld/>, (accessed 2014-01-20).
- 21) Amano, Eriko; Kudo, Eriko; Hyodo, Kenshi. Creating the future ecosystem of academic resources in Kyushu University. IFLA World Library and Information Congress. 2013. (online), <http://hdl.handle.net/2324/1397815>, (accessed 2014-01-19).

---

< 2014.1.21 受理 あまの えりこ 九州大学附属図書館 e リソースサービス室 e リソースサービス係長 >

**Eriko AMANO**

**Linking people and Linked Data: A Report of IFLA WLIC 2013**

**Abstract :** Linked Data was one of the most popular themes at the IFLA World Library Information Congress that was held in Singapore in August 2013. In this paper, the author introduces examples of linked data from a variety of countries that were presented at the satellite meeting and considers the impact and changes to workflows when university libraries really begin to utilize linked data. In addition to Linked Data, IFLA supports a number of global community activities for librarians. One of the more unique groups is the New Professionals Special Interest Group, which supports networking for new professionals. The author explains how Japanese university library staff can become involved in these types of global activities.

**Keywords :** IFLA / International Federation of Library Associations / Linked Data / community activities